

「ご存知ですか？」

# リンゴ公園にある芭蕉の句碑

元原村梅林に立てられていた、明治天皇御製の歌碑移転の経緯について、本紙は過去二度にわたって紹介をしてきた。

ともに斎藤ツイストドリル前庭より移転されてきたが、本紙で触れることとなかった他の二基の石碑についてあらためて紹介する。

その一つは、松尾芭蕉の句碑であり、もう一基は、名木「立春梅」の碑である。現在、多摩川二丁目・通称リンゴ公園には「立春梅」を中心に、御製の歌碑が右側に、左に芭蕉の句碑と並んでいる。



芭蕉句碑

(多摩川二丁目児童公園・通称リンゴ公園)

まず、大田区内の公的場所での芭蕉の句碑を見ることができるのは、唯一このリンゴ公園だけである。貴重な石碑であることは間違いない。石碑に刻まれている文字は、

## 梅香のつと目の出る山路哉

十七年春三月日 幸島桂花 拜書

句の出典は句集『炭俵』出版は元禄七年（一六九四）で、元々の句は、「むめがとにのつと目の出る山路が早朝に山路を歩いていると、どこからか梅の香りが漂ってきた。余寒が頬に冷たく、あたりは清冽な気に満ちている。折しも梅の香りに誘われるように朝日が雲を分けて「のつと」さし出た。

「のつと」という口語的表現にこの句の俳諧性がある。（井本農一・芭蕉入門より）

「むめ」は「うめ」と発音し、古語ではない。江戸時代から「うめ」と同様に使われていた。

また、十七年とあるは明治十七年であり、この年に月岡芳年による錦絵『全盛四季春・原村立春梅図』が描かれ、近隣にその名が知れることとなった。幸島桂花、拜書とあるが、日本橋で算盤商を営み、俳人として名の通った

幸島桂華園の主人が原村梅園の開闢者・原清次郎と俳句が縁で昵懇の間柄であった。月岡芳年の錦絵や、芭蕉の句碑という膳立てを考えた時、梅園の経営にあたって幸島氏の後援が大きかったことを窺わせる。

現代の俳句は、江戸時代の俳諧連歌から発句を独立させたものである。芭蕉の時代は、俳句という言葉は無かった。「梅の香にのつとに目の出る山路かな」は連歌の第一句「五・七・五」の「発句」である。門人の野坡（のぼ）が第二句で「処々に雉子の啼きたつ」と続け、「五・七・五」、「五・五」と交互に詠み続け、延々、三十六句続けて詠むことを「歌仙」、百句続けることを「百韻」という。

最後の句が「揚句」となる。蛇足になるが、「挙句のはてに・・・」の語源である。

川崎八丁噺、旧東海道筋に芭蕉の句碑がある。

## 蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,828人
	女	29,427人
	計	61,255人
世帯	34,171世帯	

平成27年5月1日現在

「麦の穂をたよりにつかむ別れかな」弟子たちと、旅立ちの別れを惜しむ際の返句である。

荏原郡原村に芭蕉の足跡がある訳ではないが、小さな公園の片隅に立つ石碑ひとつにも、人それぞれ思いを巡らす手掛りはある。

## 参考文献

北原正治 蒲田地方と梅屋敷  
井本農一 芭蕉入門

(取材 都築委員)

## お知らせ

平成二十七年九月二十七日(日)に大田区民プラザにおいて、本紙第四十七号で特集しました、歌舞伎演目「神靈矢口渡」を公演することになりました。当日は、歌舞伎公演のほか、ステージ発表や各ブース・模擬店の出店など、様々な催しを予定しています。詳細は今後チラシ・ポスター・ホームページなどでお知らせいたします。

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございました。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所  
大田区西蒲田七-12-17  
(三七三)四七八五

平成27年6月1日発行

# かまにし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

第56号

## わがまちの顔 二人三脚で絵を描く

# 高橋 富美子 さん



西蒲田六丁目にお住まいの高橋富美子さんは、昨年の十一月十六日から十九日までの四日間、傘寿(八十歳)を迎えた記念に、大田区民ホールアブリコ展示室を借りて、第二回目となる油絵展を開催しました。期間中は多くの人が来場され大成功で終えることができました。

蒲田に生まれ育った高橋さんは、中学校三年生の時、先生の勧めもあって「大田区写生コンクール」に応募し見事入賞者五名の中に入り、そのことがきっかけとなり初めての絵との出会いになりました。結婚して子育てが終えた頃を機に、油絵を習い始め、今年で三十五年

になるそうです。十年前には長年の夢が叶い当時の蒲田駅ビルグリロードで古希を記念して第一回目の個展を開催しました。今回の個展では、作品数百五十点以上ある中から四十四点を展示。「上野の森展」上位入選題名「品川船溜り」(二〇〇四年制作)や、「読売アマチュア展」上位入選題名「ランプ」(一九九二年制作)などの作品が何点も展示されていました。

高橋さんは、夫婦で旅行や散歩に出掛けた際ご主人の成好さんが景色などを写真に収める役目を進んでしてくれているそうです。時には、遠方まで高橋さんに代って成好さんお一人で景色を撮りに行くこともあるそうです。収めた写真を元に高橋さんが描く、夫婦二人三脚で一つの作品が完成すると話していました。毎年地元商店街プロムナード蓮沼通りで開催のフリーマーケットに高橋さんの油絵、ご主人成好さんが撮られた写真も一緒に出品されていました。毎回楽しみにしていた人もいたそうです。



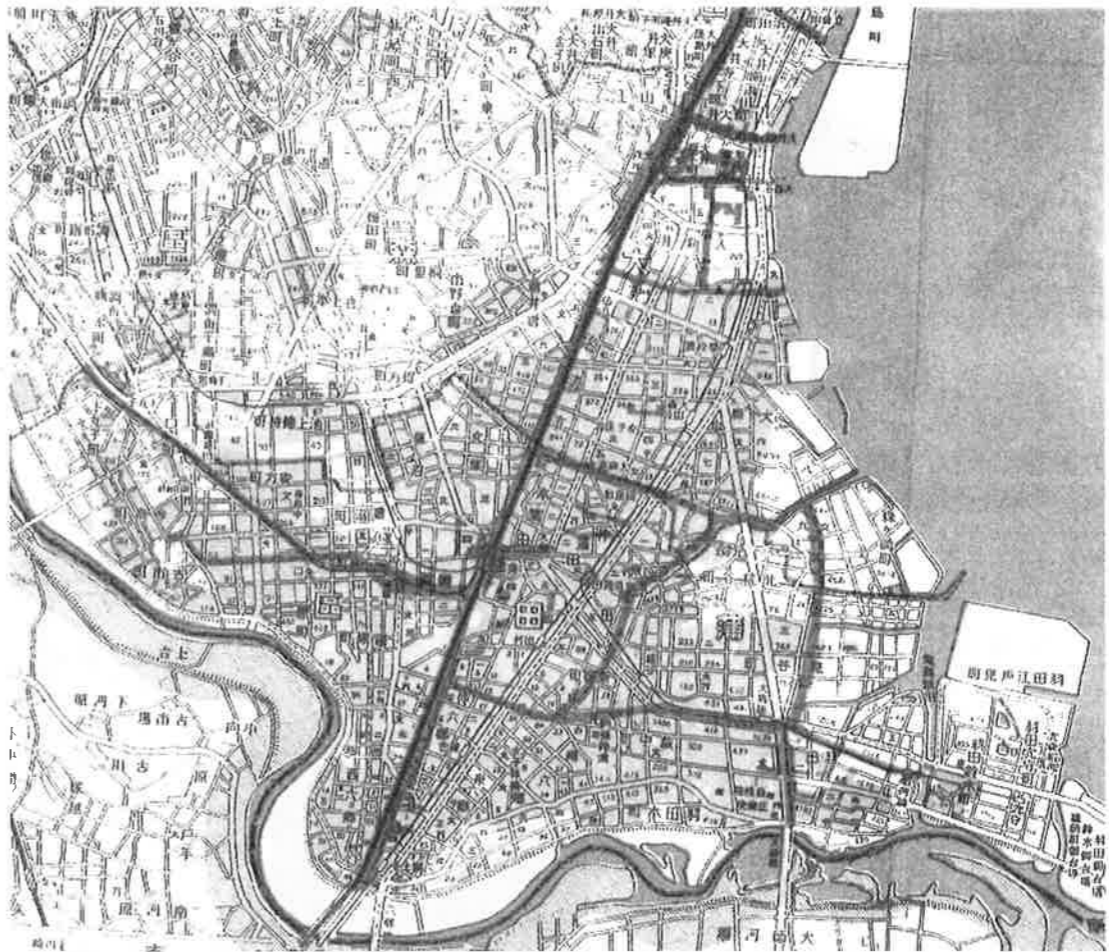
霊峰富士 (2014年制作)

長い期間、絵を習い続けているのは、「食べるものもない何もない、戦中戦後の厳しい時代を乗り切り、何よりも家庭と仕事との両立の中で二人の娘の後押しがあったからこそここまで来ることができました。」油絵と出会い、三人の恩師とのめぐり合いが幸運でした。

また「十年後の九十歳(卒寿)に三回目の個展を開けるよう、マイペースで頑張ります」と目を輝かせ抱負を語っていました。力強い家族の応援とともに新たな挑戦の高橋富美子さんにエールを送ります。百歳も目指して頑張ってください!

(取材 伊藤 稲岡委員)

# 戦後七十年の節目の年に わが町の空襲



色のついた部分が戦災で焼失した区域

今年が敗戦から七十年の節目の年にあたります。兵器として飛行機が登場して以降の近代の戦争は、戦場における兵士の犠牲だけでなく、老人、女性、子供など武器を持たない一般市民が無差別爆撃によって犠牲になっています。原子爆弾という無差別殺人兵器も初めて使われました。二度と戦争の惨禍を他国に与えることも、自ら味わうこともしたくないというのは私たちの共通の思いです。戦争体験者が減り、記憶も風化しつつありますが、だからこそ戦争の惨禍を次の世代に語り継いでいく必要があるのではないのでしょうか。そこで今回は「わが町の空襲」を特集しました。

一九四五（昭和二十）年三月十日未明、一晩で約十万人が犠牲になったといわれる東京大空襲はよく知られていますが、都内の軍需工場の約四分の一が密集し、「兵器廠の街」の景観を呈していた大田区（当時は大森区と蒲田区）でも、度重なる空襲を受け、大きな被害を出しました。とくに蒲田区の被害は大きく、区域の約八十パーセントが焦土と化し、住民の約六十七パーセントが罹災しました。現在の蒲田小学校そばにあった蒲田区役所は四月十五日の空襲で焼失し、移転先の矢口東国民学校でも五月二十四日に直撃を受けて炎上してしまいました。

一九四二（昭和十七）年一月一日現在、六十万人余りあった大田区の人口が、戦後すぐの九月一日には十八万四千余人余りと三分の一以下に激減したとされています。父と私は家に残り、消火活動するつもりでしたが、西の空が真っ赤に染まり異常な事態を感じた。これは消火活動をしている状況ではないと、家の前の防空壕に布団、食器類を運び込んだ後、父は過去帳、私は明治時代の柱時計を持って母たちの後を追ひ、合流することができた。

落ち着いた時点で家に戻ると、蒲田駅が見えるほど辺り一面が焼け野原になっていました。焼けた家には水道管がメートルほど立って水が飲むことができた。防空壕に運び込んだ布団なども全部焼けてしまった。当時の蒲田は三十センチも掘ると水が出て、防空壕の役目は果たさなかった。

一旦被害に遭わなかった大森の親戚の家に行ったところ、親戚の人で一杯、やむを得ず、一晩で戻ることになりました。呑川沿いに建物疎開で解体されていた木材、畳、布団などがあつたので大八車で運び、バラック小屋を建てた。戦災を受けてから数カ月も経ったころ、家の付近に不発焼夷弾が数発残っていて、焼夷弾の中の燃料を取り出そうとした人がいた。我が家の前でそれを見ていた弟が、爆発した焼夷弾を浴びて亡くなった。

上記のほかに、実際に兵隊としてシシガポールやスマトラ島へ従軍された方の体験談などもお聞きしましたが、紙面の都合で今回は割愛させていただきます。機会があったら是非記録に残し、戦争の悲惨さと平和の大切さを

とからも戦争の厳しさがわかります。中でも最も大きな被害を受けたのは四月十五日で、城南大空襲とよばれています。今回とりあげた体験談もこのときのものです。

末尾には参考資料を記載しました。大田区関係の被災記録や体験者の証言などは、十分とは言えないまでも数多く残されており、蒲田西地区では当時の小林町、蓮沼町、御園町などに住んでいた方の体験談が記録されています。そのほとんどが図書館などで閲覧することができずから、本誌ではそこからの再録はせず、新たに聞き取りをしたり、寄せられた手記を中心にまとめましたが、紙面の都合で要約させていただきます。

伊藤 哲夫さん（昭和四年生まれ、当時蒲田区安方町在住）

空襲警報が発令されたとき父は夜勤で留守、いつもの通り母親と妹たちで防空壕に避難した。B29からの大量の焼夷弾が落とされ、近辺が一斉に炎に包まれた。このままでは逃げられなくなると身の危険を感じ、まだ火災が発生していない池上方面に逃げることを決めた。防空頭巾の上に布団を被り、延焼のおそれが少ないと思われた畑地までくると、続々と近隣の人たちが集まってきた。

目前の荏原中学（現日体荏原高校）が突然燃え上がった。熱くて顔を上げることができず、火の粉も絶え間なく降り注いできた。道路脇の溝からバケ

（取材 都築 瀬川、多田委員）

主要参考文献、資料  
『東京大空襲・戦災誌』（第二巻、第三巻） 東京空襲を記録する会

『大田区史 下巻』大田区  
『大田区史年表』大田区  
『史誌23』（特集 「戦中・戦後の大田区」）大田区  
『史誌27』（特集 「大田区の戦後」）大田区  
『大田の史話その2』大田区  
『平和つなごに 大田区戦争体験記録』大田区

『大田区の集団学童疎開 平和のいしずえ』大田区教育委員会  
『いま、平和ですか』大田・平和のため戦争資料実行委員会 草友出版  
『無念の叫び 戦争を知らないあなたに』東京都退職女性教職員の会  
『太平洋戦争と久が原の子供たち』久原小昭和二十年卒業同期生  
『集団学童疎開の思い出 一年四か月の合宿』天明信

『戦禍と青春』道塚小学校一期生  
『大きな戦争 小さな思い出』矢口東小学校十四期生  
『大田平和ガイドブック 未来につたえる大田の平和』大田九条の会  
ほか

ツでどぶ水を汲み、布団の上からかけ続け、火の粉を消した。

夜明け近くになってから自宅の戻ると、道路を挟んだ前の家までが焼け、まだパチパチと音を立てて燃えていたが、わが家は道路側の庭木が焼けただけだったが、奇跡的に焼け残っていた。「お前は男だから父を探しに行け」と

いわれ、多摩川の土手際にあつた事務所所へ向かうと、多摩川に通じる道の両側は全て焼け、まだ炎も消えずにくすぶっていた。靴底が火傷するくらい熱かつた。道の途中に転がる焼け焦げた障害物を避けながら多摩川を目指す、やはり事務所は焼け落ちていた。

多摩川の河川敷にはまだ多くの人たちがいた。夜が明け朝日が出ているはずなのに、煙が霧のように立ち込め人の顔が判別できなかった。人混みの中で父の声がし、ようやく巡り合うことができて来た道を引き返したが、飛び越してきた道の途中に転がる障害物は全て焼死体であつた。それは惨しい数であつた。

大塚 茂子さん（大正十三年生まれ、当時蒲田区原町在住）

四月十五日、警戒警報がすぐに空襲警報に変わった時には、もうB29の爆音が聞こえていた。私と父、母、妹の四人はあわてて防空壕に避難したが、ものすごい音と地響きが聞こえ、周りが明るくなった。すぐ裏の田中さんの家から炎が吹きだしていた。

目の前の多摩川に逃げると後から

後から大勢の人が押しかけて、家族はバラバラになってしまった。多摩川大橋が焼け落ち、川に留めてあつた何艘もの船に火が付き、流されていった。

川上から熱風が吹いてきて、河原の雑草に伏せていても顔が熱くなった。数えきれないくらいB29が低空で頭の上を飛んでいった。

伏せていた時間がどれほどだったのかも覚えていないが、明るくなってやっと家族全員と無事に会うことができた。何を話したのかも記憶になく、ただ母と妹と抱き合っていた。矢口小学校へ行き、おにぎりをもらったのが、翌日かあるいは翌々日かなのかもはっきりしない。

戦前からあつた井戸のそばに、薦職だった父が焼け跡の残骸や焼けたトタンを拾い集め、小さな掘った小屋を建てた。私は就職先の黒田狭範の御嶽山寮へ移り、妹は再度の空襲を恐れ、親戚の田舎へ疎開した。

原 環さん（昭和三年生まれ、当時蒲田区御園町在住）

空襲警報が出た時点で、多摩川の河川敷は周りに軍需工場があつて敵に狙われやすいということで、母と弟、妹は池上本門寺の山へ避難することにしました。蓮沼駅から池上駅へ向かって左側は沼地が多く、馬見場と言っていた所で、家はなく、空襲警報が鳴れば電車はストップ、線路の上を歩いて池上まで行つた。

当時、町会では男は消火活動が指示